

「一流になりなさい。それには、一流だと思い込むことだ」という本からです  
人間は成長発展することがテーマだ。

「どんな人間にも誇りがある。人を育てるときは、その誇りも一緒に育ててあげるのだよ」

30 歳のときに 70 名の部下を預かりました。当時の会社は 200 名ですから、大変な責任を任せてくれたものです。怖いもの知らずで、無理も無茶もあるものかと仕事をしていく私を、きっと心配しながら船井先生は見ていたことでしょう。そのようなアドバイスをよくしてくれました。そんなアドバイスを、理解していたつもりになっていても、まったく本人は理解できていなかったと思います。いまもそうかもしれません。

○五年、由樹が九歳、五年生の時のことです。由樹はなぜか、回転寿司が大好きで、いわば熱烈なマイブームが今でも続いています。休みで家にいると、朝六時になる頃、耳元でささやくのです。「パパ。おきてよ。お寿司！お寿司行こう」うーん回転寿司かと一瞬躊躇するのですが、たまにしか一緒に時間をともにできない弱み。昼には回転寿司の店に向かうことになります。

そんな彼ですから、お気に入りの回転寿司店では常連扱いで、「あら、由樹君ありがとうございます」などと言われて、ご満悦でカウンターに座ります。その頃でも、子供用の椅子は断固拒否です。何といっても五年生ですから。堂々と背伸びをして、カウンターに座りました。その日は、いつものお気に入りのお姉さん従業員は休みのようでした。初めて目にする気立てのよいお嬢さんが、席まで誘導してくれました。「あらカウンターがいいの？テーブル席のほうが座りやすいんじゃない？」優しく声をかけてくれるのですが、彼はカウンターへ。背伸びをしながら席に座ります。子供用の椅子を持ってきてくれたのに無視です。いつものお姉さん従業員は、彼を五年生として扱ってくれます。一度彼に断られてからは、子供用の椅子を勧めることもしません。「お水のむ？じゃ持ってきますね」どう見ても四、五歳の由樹に優しく子供言葉で語りかけてくるその新顔のお嬢さんに、彼は不満そうです。「はい。お水どうぞ」目の前に置かれたコップ。それには、熊さん、ウサギさんが一杯に描かれていて、幼児用のものであることは、明らかです。いつもなら、「ありがとう」と元気よく言う彼は、黙ってうつむいています。ありがとうは？と促したときです。「バ・カ……」小さい声で、そう言ったのです。そのとき、怒れませんでした。誰が見ても由樹君、君は小さい子に見えるんだよ。お姉さんも、きっと三歳だと思ったんだね。でも、ありがとうは、ちゃんと言わないとね。耳元でそう言うと、小さく、「あ・り・が・と」と言ってくれました。小さくても、彼にもしっかりとしたプライドはあるのです。そう思われ、また教えられたなど、ひとり言を口にしていました。人間は、成長発展する、それが最大のテーマだと、船井先生はよく語ってくれました。そしてその原動力は、「自分に誇りをもつことだ。そして管理職になったとき、その人間の誇りを大切にすることだよ。自分への誇り、他人への尊敬心が、人間の成長の背骨だからね」あの小さくバカとささやいた由樹の声を、その教えと重ね合わせていました。

そんな由樹も 18 歳。いよいよこの春社会人となります。「お仕事いいなあ、お仕事あこがれー！」出張に出る私の背中に、陽気な声をあげるようになって四～五年が経ちます。仕事への憧れ、仕事をする事への尊敬心を持つように育てられているようです。人間の役割は働くことによってしか果たせない。船井先生の言葉を心で、最もよく理解しているのは、由樹かもしれないとつぶやき、私は時として幸せな気分になるのです。

カッコ内を埋めて下さい

その原動力は、「( )をもつことだ。そして管理職になったとき、その( )を大切にすることだよ。自分への( )誇り、他人への( )が、人間の成長の背骨だからね」